

20010516

厚生科学研究費補助金

21世紀型医療開拓推進研究事業

EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究

平成 13 年度 総括研究報告書

主任研究者 緒方 裕光

平成 14 (2002) 年 3 月

## 目 次

I.	総括研究報告書	
	EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究 ……………	1
	緒方裕光	
	(資料1) 第2回EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ 関連資料…	5
	(資料2) 第4回EBMリサーチライブラリアンワークショップ テキスト…………	23
II.	研究成果の刊行に関する一覧表 ……………	37
III.	研究成果の別刷 ……………	39

厚生科学研究費補助金 (21世紀型医療開拓推進研究事業)  
平成13年度 総括研究報告書

EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究

主任研究者 緒方 裕光 放射線衛生学部放射線影響室長

分担研究者

津谷 喜一郎 東京大学大学院薬学系研究科 教授

野添 篤毅 愛知淑徳大学文学部 教授

磯野 威 国立公衆衛生院附属図書館  
図書専門官

教育プログラム、教材等を改定し、EBMの情報基盤に関わる、より広範な人材の育成を目的として、東京(対象者:医学雑誌編集者)および福岡(対象者:リサーチライブラリアン)でそれぞれワークショップを実施した。

A. 研究目的

ここ数年わが国の医療現場において、科学的根拠に基づく医療(EBM)に対する関心とニーズが高まってきている。しかし、わが国においては、システマティックレビューの方法論や教育が不十分であるために、EBMの根幹ともいべき情報基盤を支えるリサーチライブラリアンの育成がなされていないという問題がある。そのため、情報基盤を整備し活用を促すものとして、「リサーチライブラリアン」の養成は緊急の課題であるといえる。ここでいう「リサーチライブラリアン」とは、図書館員のみならず、医学データベース作成者、雑誌編集者などEBMに関わる広い領域の情報関係者を含む。

本研究は、先行研究である平成10年度厚生科学特別研究「リサーチライブラリアン養成についての調査研究」(以下、平成10年度研究)を引き継ぐものであり、広くEBMに関わる情報関係者のための教育プログラムの開発と実際の人材養成を目的とする。3年計画の第1年度は、平成10年度研究において開発された教育プログラムの改良と実際の使用に重点をおいて実施された。第2年度においては、平成10年度研究の成果として出版されたテキスト「EBMのための情報戦略」(監修:中嶋宏、編集:津谷喜一郎、山崎茂明、坂巻弘之、出版:中外医学社)を利用し、その効果を確認するとともに、新たな取り組みとして、エビデンスを「つたえる」立場にある医学雑誌の編集者を対象としたワークショップを実施した。さらに、今年度においては、これまでの成果をふまえて、

B. 研究方法

主任研究者は、EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究(総括)を、分担研究者は、研究デザイン教育とハンドサーチの方法論に関する研究、リサーチライブラリアン養成プログラム・教材の効果測定に関する研究をそれぞれ担当した。

本年度研究は、次に挙げる2つのワークショップを実施し、その参加者に対するアンケート調査をもとにそれぞれのワークショップおよび教材の有効性を評価した。

1) 第2回EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ

平成13年11月6日(火)に国立公衆衛生院で開催した。 트레이ニーとして医学雑誌編集者を中心とする32名、トレーナーとして9名、準備のための研究協力者・スタッフが9名、合計50名が参加した。

本プログラムは、医学雑誌の編集者を対象としたワークショップとして、通常のリサーチライブラリアン・ワークショップ、および前年度に行われた医学メディア対象の第1回ワークショップの教育プログラムに修正を加えるかたちで今回新たに開発された。教材は同様に前述の「EBMのための情報戦略」を主とし、それを補足するものとして当日の講演内容(Power Pointのプリントアウト)をまとめたファイル1冊、他に参考書として「わかりやすいEBM講座」を用い、時間配分もそれぞれの理解がより進むように調整した。

2) 第4回EBMリサーチライブラリアン・ワークショップ

平成14年1月22日(火)、23日(水)の2日間にわたり九州大学附属図書館で開催した。トレーナーとして大学・病院の図書館関係者を中心とする20名、トレーナーとして10名、準備のための研究協力者・スタッフ4名、合計34名が参加した。前年度の教育プログラムを改良し、教材は前述の「EBMのための情報戦略」を主とし、それを補足するものとして当日の講演内容(Power Pointのプリントアウト)をまとめたファイル1冊、他に参考書として「わかりやすいEBM講座」を用い、時間配分もそれぞれの理解がより進むように調整した。

### C. 研究結果

各ワークショップ参加者を対象に、EBMに関する基礎知識やワークショップに対する評価を問うアンケート調査を実施した。

#### 1) 第1回 EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ

アンケート調査は、事前アンケート事後アンケートともに参加32名中最大18名が回答した。本アンケートにより、ワークショップの開催形式、プログラム内容、教材などの評価、業務に役立つ点、理解できた点、今後の要望など多岐にわたる事項を調査した。

#### 2) 第3回 EBMリサーチライブラリアン・ワークショップ

アンケート調査は、事前アンケート事後アンケートともに参加20名中最大12名が回答した。本アンケートにより、上記と同様に、ワークショップの開催形式、プログラム内容、教材などの評価、業務に役立つ点、理解できた点、今後の要望などを調査した。

なお、上記アンケート調査の結果の詳細は資料1および資料2の通りである。

### D. 考察

#### 1) 第2回 EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ

今回のワークショップは前回の経験を踏まえて、開催を半日間とし、また最後にフリーディスカッションの時間を設けた。開催形式の評価については概ね良好であった(資料1、図1・10)。

アンケート結果からうかがえる主な評価は、概

略以下のとおりであった。

#### ① プログラムおよび内容について

プログラム全体への評価は良好であったが、時間配分や、休憩時間などについては改善の余地があると思われる(資料1、図1・11)。また、質疑応答、実習、フリーディスカッションなどの時間に余裕を持たせるためには、半日の時間では時間不足であったとも考えられる。各セッションの内容については、参加者の日常業務との関係もあり、身近な問題として捉えられるテーマについては理解しやすかったようである。また、業務として担当する雑誌が商業誌の場合と学術誌の場合とでは、参加者の問題意識に少なからずギャップがあることがうかがわれた。

#### ② 教材について

教材の内容については全般的に評価は高かった(資料1、表1・13)。見やすい図の作成、バインダーの形式、パソコンの使用、といったハード面の問題については今後の課題である。

#### ③ 本ワークショップの効果および今後の要望について

本ワークショップの業務への有用性については、回答者全員(15名)が「役に立つ」と回答した(資料1、図1・14)。とくに、文献または情報の効率的検索、編集方針やEBMに関する理解、などの点において有用であるという意見が多かった(資料1、表1・10)。また、次回ワークショップに対して期待している参加者も多かった(資料1、図1・12、表1・14、表1・15)。さらに、EBMをテーマとした医学雑誌編集者と医師(研究者)との議論やより具体的な方法論などが今後のテーマになり得ることが示唆された。

#### 2) 第4回 EBMリサーチライブラリアン・ワークショップ

アンケート調査の結果を前年度ワークショップと比較すると、概ね良好な結果が得られた。また、リサーチライブラリアンについては今回が4回目のワークショップであり、内容、教材のいずれも充実度が増したものと思われる。その他特に注目される点は以下のとおりである。

#### ① プログラム、内容について

一部、内容が豊富なため時間が短いと感じられたセッションもあったようだが、全体として、「分かりやすくよく理解できた」という意見が多かった(資料2、表2・3～表2・9)。

## ② 教材について

今回のようなテキストの形態（PowerPoint スライドのアウトプットをまとめたファイル、および出版物）は、前々回の受講者からの希望を取り入れたものであり、前回のワークショップから利用している。これについては全般に評価が高かった。

## ③ 本ワークショップの効果および今後の要望について

本ワークショップが今後の業務に役立つ点として、EBM に対する全体的な理解ができたこと、問題意識が持てたこと、などが挙げられた。さらに将来的なテーマとして、参加対象者の拡大、より系統的なカリキュラムの開発、などが考えられる。

## E. 結論

本研究の各ワークショップにて教育を受けたリサーチライブラリアンは、大学・病院等図書館員として、データベース作成者として、構造化抄録の推進者として、EBM の実践のための情報基盤作成に対する貢献が期待される。また、ワークショップを通じて医学メディア関係の編集者のEBM に対する認識を高め、今後は構造化抄録やEBM を指向した編集方針などが普及していくものと思われる。

本年度までに使用した教材とワークショップ内容に対する参加者の意見を通じて、今後は、より質の高い教育プログラムと教材開発が期待される。

## F. 健康危険情報

特になし。

## G. 研究発表

特になし。

## H. 知的財産権の出願・登録状況

特になし。

平成13年度「EBMを支えるリサーチ・ライブラリアン養成についての調査研究」班名簿

氏名	所属1	所属2		
緒方 裕光	国立公衆衛生院	放射線衛生学部、附属図書館	放射線影響室長	主任研究者
青木 仕	順天堂大学	図書館	司書	
荒川 はつ子	国立公衆衛生院	労働衛生学部、附属図書館	主任研究官	
磯野 威	国立公衆衛生院	附属図書館	図書専門官	分担研究者
岩石 隆光	毎日新聞社	毎日ライフ・JAMA日本語版	編集長	
岩崎 理香	国際疾病管理研究所	研究開発グループ	部長 主席研究員	
岩島 真理	科学技術振興事業団	文献情報部 生物科学部門		
宇山久美子	財団法人 国際医学情報センター	情報資料部	課長	
大沢 功	名古屋大学	総合保健体育科学センター 大学院医学系研究科博士課程	助教授	
金子 善博	東京医科歯科大学		医師	
河合富士美	聖路加国際病院	医学図書館	司書	
河野 光男	財団法人 日本医薬情報センター	情報サービス部門	技術渉外部長	
北澤 京子	日経BP社	日経メディカル	副編集長	
久米 敏雄	科学技術振興事業団	文献情報部 生物科学部門	主任情報員	
栗原千絵子	コントローラー委員会			
小田中徹也	国立京都病院	図書室		
酒井 由紀子	慶應義塾大学	日吉メディアセンター	司書	
穴戸 邦彦	済生会中央病院	内科	医師	
谷藤 芳史	国際医療福祉大学	国際医療福祉総合研究所	研究員	
田部井香織	東京慈恵会医科大学	医学情報センター	司書	
津谷 喜一郎	東京大学	大学院薬学系研究科・医薬経済学	客員教授	
中山 健夫	京都大学大学院医学研究科	医療システム情報学分野	助教授	
名郷 直樹	作手村診療所		所長	
野添 篤毅	愛知淑徳大学	文学部図書館情報学科	教授	分担研究者
平田 智子	国立公衆衛生院	附属図書館	研究生	
廣瀬美智代	国立公衆衛生院	附属図書館	研究生	
福岡 敏雄	名古屋大学医学部附属病院		医師	
宮野 昌明	医学中央雑誌刊行会	事業部	部長	
山崎 茂明	愛知淑徳大学	文学部図書館情報学科	教授	

## 資料1

### 第2回EBM時代の医学メディアのあり方・ワークショップ関連資料 (2001年11月6日開催)

目 次	page
1. 第2回 EBM時代の医学メディアのあり方・ワークショップ プログラム	7
2. 第2回 EBM時代の医学メディアのあり方・ワークショップ (2001年11月6日開催)参加者名簿	8
3. アンケート結果	9
(1) 参加者の属性	9
(2) 各セッションへの評価	11
(3) 全体への評価	16

1. 「第2回EBM時代の医学メディアのあり方・ワークショップ」

●2001年11月6日(火) 13:00~18:30

- 13:00~13:15 開会あいさつ  
主任研究者: 緒方 裕光 (国立公衆衛生院)
- 13:15~14:00 医学研究デザインと医学ジャーナルの関係  
福岡 敏雄 (名古屋大学)
- 14:00~15:30 医学文献データベースの効率的検索法  
チューター: 河合 富士美 (聖路加国際病院)  
田部井 香織 (東京慈恵会医科大学)  
廣瀬 美智代 (国立公衆衛生院)
- 15:30~15:50 記念撮影
- 15:50~16:35 EBMと医学分野のジャーナルの役割  
山崎 茂明 (愛知淑徳大学)
- 16:35~17:20 「臨床評価」誌の取り組みについて  
栗原千絵子 (臨床評価研究会)
- 17:20~17:30 - coffee break -
- 17:30~18:30 質疑応答・自由討論  
コーディネーター: 岩石隆光 (「JAMA日本語版」編集部)  
まとめ  
津谷 喜一郎 (東京大学)



2. 第2回EBM時代の医学メディアのあり方・ワークショップ  
(2001年11月6日開催)

参加者名簿

所属名	氏名
1 医学書院医学雑誌部	青木大祐
2 エムイー振興協会	有永剛仁
3 (株)メディカルトリビューン企画編集部	五十嵐麻子
4 ライフサイエンス・メディカ	石沢弘平
5 日経BP社 日経メディカル編集部	井田恭子
6 医歯薬出版「歯科技工」編集部	猪瀬学
7 日本看護協会出版会 雑誌編集部	大川和夫
8 日経BP社 日経メディカル編集部	亀甲綾乃
9 日経BP社 日経メディカル編集部	北澤京子
10 虎の門病院図書室	熊谷智恵子
11 健康産業新聞社 メディカルニュートリション編集部	佐賀健
12 三輪書店「脊椎脊髄ジャーナル」編集室	島田明子
13 医学中央雑誌刊行会編成課	高木孝三
14 日経BP社 日経メディカル編集部	高志昌宏
15 金原出版雑誌部 臨床放射線編集室	滝沢浩利
16 医歯薬出版第二出版部	辻晶生
17 医学書院雑誌部	土田一慧
18 日本評論社 第三編集部	永本潤
19 (財)国際医学情報センター	西岡文美
20 日経BP社 日経メディカル編集部	橋本佳子
21 日本看護協会出版会 雑誌編集部	濱田拓男
22 羊土社編集部	久本容子
エルゼビア・サイエンス ミクスジャーナル本部	
23 「臨床と薬物治療」編集部	日吉伸介
24 聖母女子短期大学	福留はるみ
25 医学中央雑誌刊行会編成課	藤川順子
26 文光堂企画部 Quality Nursing 編集室	藤本さおり
27 メジカルビュー社「関節外科」編集部	藤原琢也
28 医学書院「脳神経外科」編集室	松永彩子
29 (株)日本医学中央会(メディカル・コア)	本宮敦司
30 中山書店編集部	山本宏
31 三輪書店編集部	吉田剛
32 医学書院医学雑誌部	渡辺秀夫

### 3. アンケート解析結果 (回収数18)

#### (1) 参加者の属性

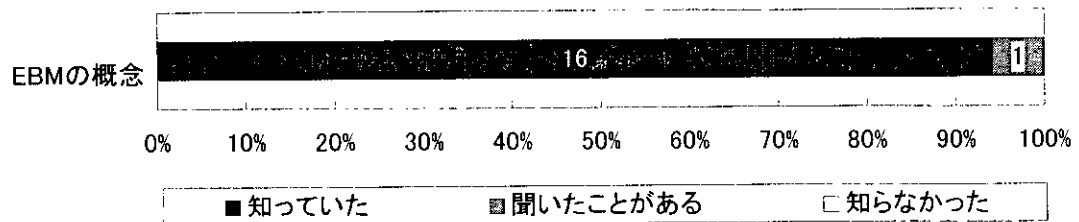


図1-1 EBM概念の知識

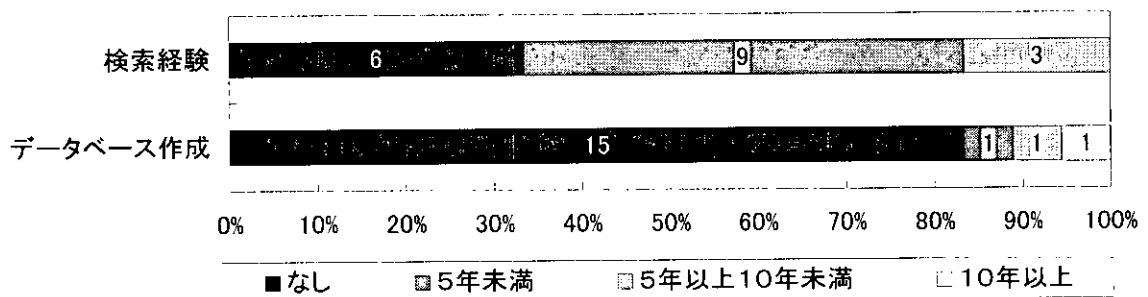


図1-2 検索及びデータベース作成の経験年数

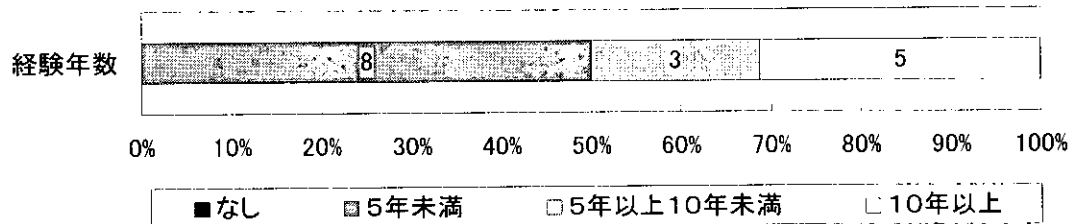


図1-3 医学雑誌の経験年数

表1-1 担当雑誌名

臨床検査／理学療法ジャーナル／病院／検査と技術	
国際ナースレビュー	からだの科学
在宅医療	日経メディカル
あいみつく	脳神経外科
歯科技士	レジデントノート
月刊「関節外科」	臨床放射線
	看護

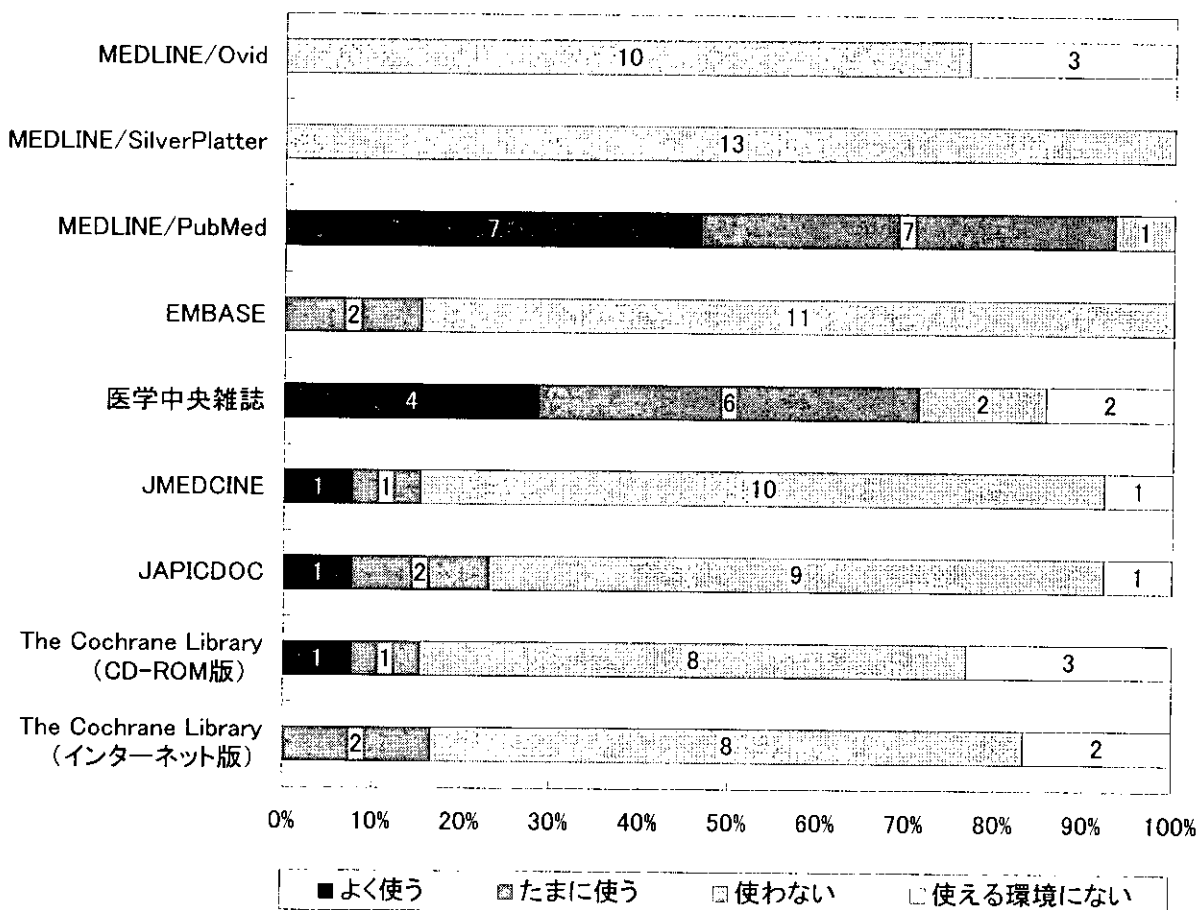


図1-4 データベースの利用状況

表1-2 その他利用するデータベース

新聞記事DB

Book Web 和書検索 / Books.or.jp、日本医事出版協

表1-3 データベース関連の要望

1. 「人物」を調べられる、使いよい無料のDBがあれば……。今の検索の仕方が人物を追うやり方なのでダメなんでしょうがその「人物」から各種データの得られるものがあれば。
2. 日本の医科学文献もMEDLINEのようにフリーアクセスにすべき。
3. 和雑誌の正式文献略称が検索できるサイトはないでしょうか？ 医学中央雑誌に記載の略称はあまり になりません。

(2) 各セッションへの評価

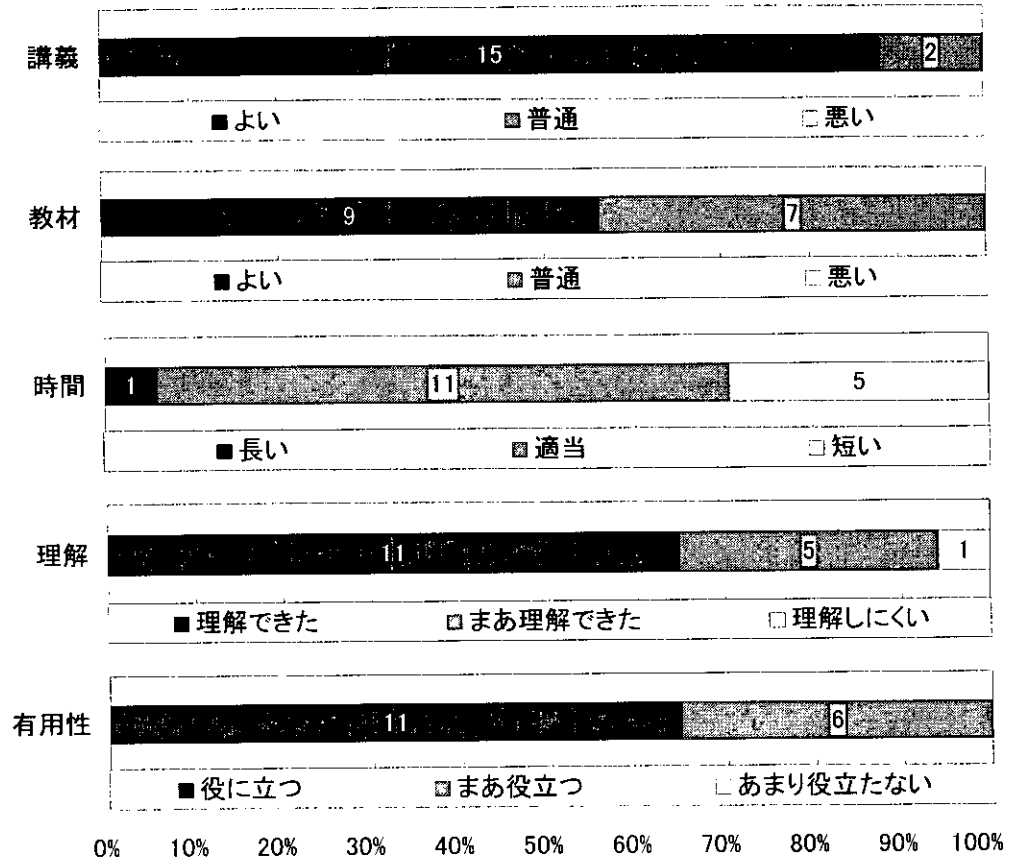


図1-5 医学研究デザインと医学ジャーナルの関係

表1-4 医学研究デザインと医学ジャーナルの関係

1. デザインとして無作為性を保証する具体的な方法を聞いたかった。
2. 気管支炎に対する抗生剤の使用など、具体的な例を挙げての説明がわかりやすく、よかった。
3. 質的研究(定性的研究)によるEBMが在宅医療の評価では大事になる「患者が何を願っているか」がテーマとして大きい。
4. RCT等学術誌の編集者と取材を基本とする立場の相違があるので話にギャップ(業務に直結しない)があった。
5. 研究designについて、テーマによっては、RCTがベストとはいえないという点が新鮮だった。
6. EBMIに関しての知識は確実に増えました。次にはどう役立てるかが課題となりました。
7. 講義形式だったので、福岡先生の本領? が発揮できていなかったようなのが残念。
8. 業界が「看護」の世界なのでRCTはあまりなじまず、質的研究についてもう少し深く講義して欲しかった。ただし、全体の講義内容は大変役立つ。

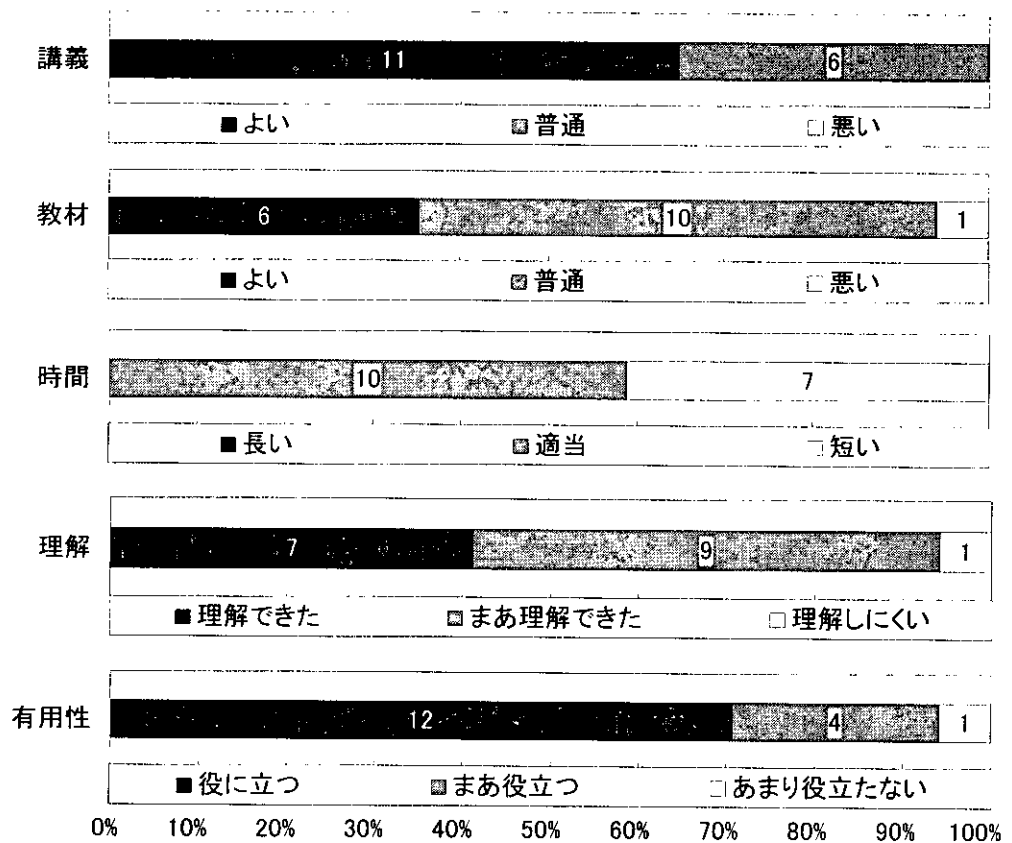


図1-6 医学文献データベースの効率的検索法

表1-5 医学文献データベースの効率的検索法

1. PubMed の活用法が拡がりました。
2. ワークブックはコンセプトは良いが、説明がわかりづらかった。
3. まず一応英語は旅行者程度できるつもりだが、英語を前提にされても困る。初めて知ることばかりだったが、時間が短かった。
4. "limit", "citation" があれほど便利だとは知らなかった。
5. 各自でPCを動かした点がよかった。
6. 大変役に立った。もう少し時間があつたらよりよかった。
7. 有用な効率的な使い方を知ることができました。Dr.の方も意外とご存知ないのではないのでしょうか。
8. 2~3つは皆で一緒にやっているのをに入れてほしかった。教材は最高。
9. 教材に最初から[PS],[PT]について記載されていればBest! 同じくPubMedの<limit>の項を詳しく記述していただければ……。

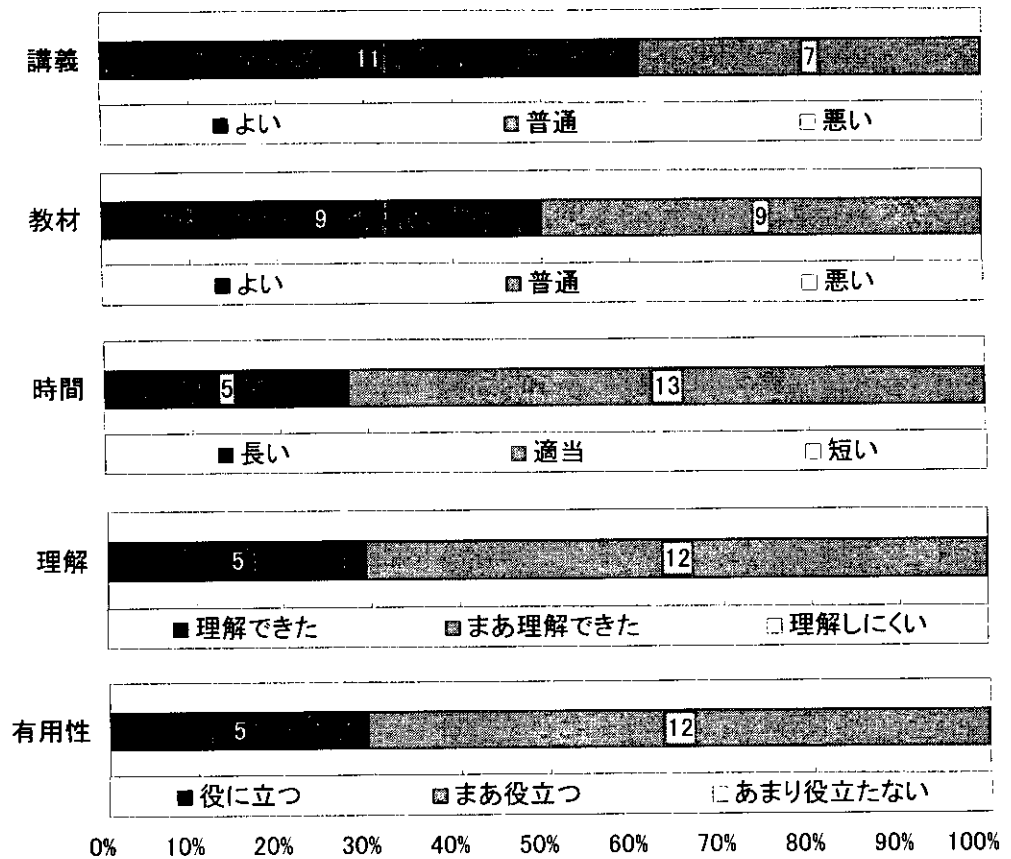


図1-7 EBMと医学分野のジャーナルの役割

表 1-6 EBMと医学分野のジャーナルの役割

1. 日本の講座制の産む悪しき風潮に、同感しました。
2. 撤回情報をデータベースにどう反映すべきなのか、考えさせられた。
3. 自分自身では、撤回論文の存在自体知らなかった。看ごの世界でこのような例を聞いたことはないが、十分起こりうる話だと思った。
4. 研究論文誌ではないので、不正に出会う機会自体ない。
5. 自分の担当が原著論文を扱わない雑誌なので、直接参考になる話は少なかった。
6. 不正行為に関して。特にCOPE,ORIIについて役に立った。

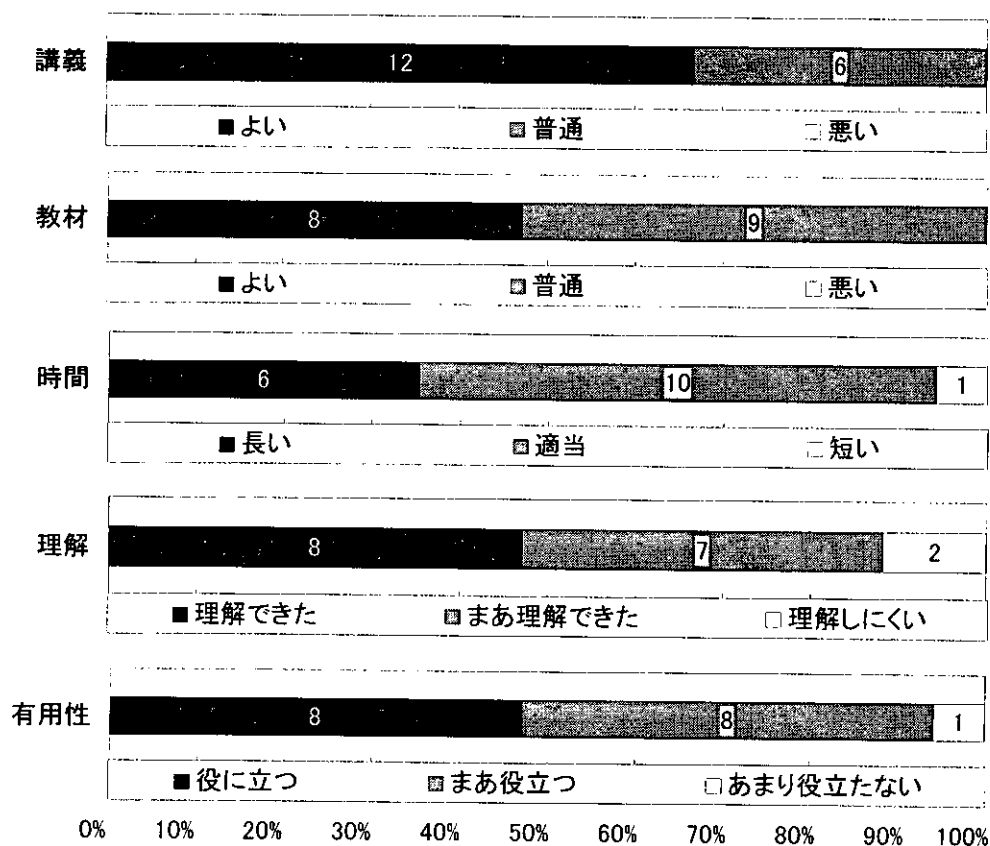


図1-8 「臨床評価」誌の取り組みについて

表1-7 「臨床評価」誌の取り組みについて

1. 具体的なお話しでよかった。
2. URMとCONSORTについて、基礎知識がなかったので、多少理解できた、と思う。
3. 自分の雑誌で同じようなことをした場合を考えさせられた。やはり現実問題として、論文の書き方についてこれだけ細かい注文をつけるのは、雑誌社会全体の連けいと、研究者の意識改革を同時に行う必要があると感じた。
4. 研究論文以外の対応。やはり情報量の多い講義ですべては理解できない。
5. 投稿スタイルをとる雑誌を扱っているわけではないので自分自身の身近な話題ではなかった。
6. 興味深かった。現在投稿規定改訂検討中なのでいろいろ考えさせられることが多かった。
7. 私どもになじみのないテーマでしたので理解しづらかったのですが、編集方針を考えるに、良い機会となりました。
8. コントローラー委員会について。看護関係ではRCTはなじまず質的研究論の方法が検討されている。

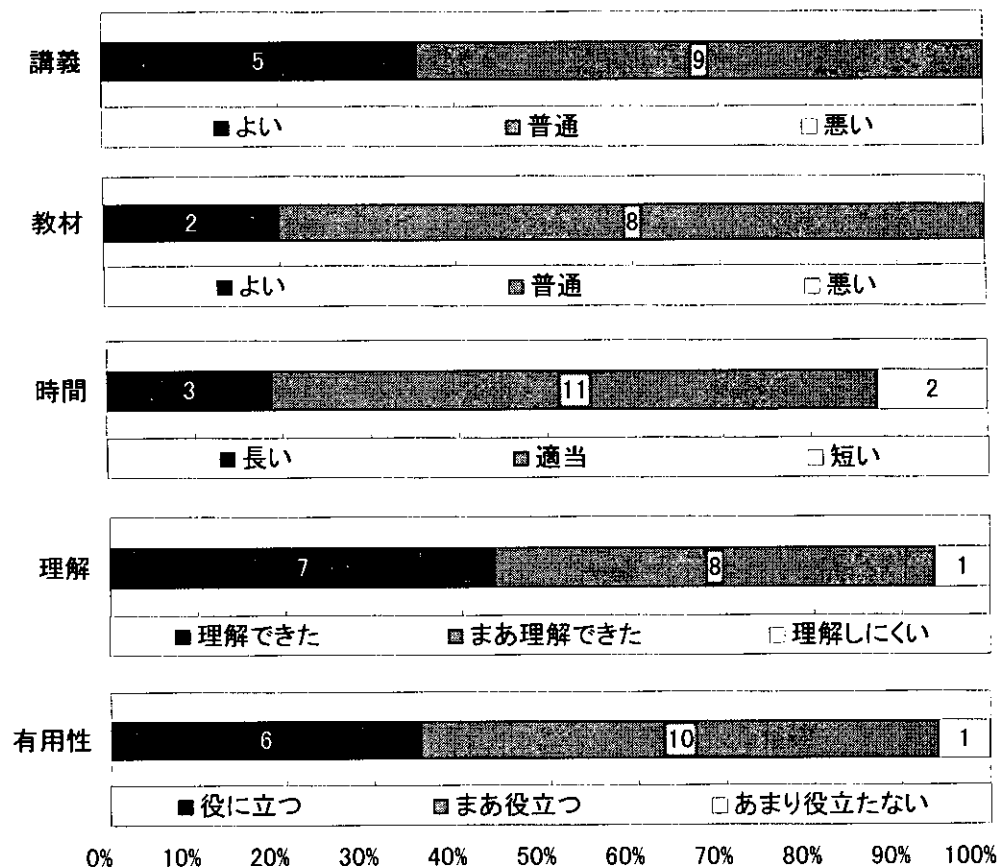


図1-9 質疑応答、自由討論

表1-8 質疑応答、自由討論

1. 日本語文献の英語文献への翻訳発表の話は興味深かった。会場からの意見で「原著は英語で、解説は日本語で、と考えている」という発言は、衝撃的であった。看護分野でも若手の研究者がそう考える可能性は十分あると感じた。
2. 構造化抄録のEBMに实际的に果たす役割、今後学会発表におけるケースレポートの意味づけ。学会発表のかたちも定型化してくるだろうと思います。
3. 原著論文雑誌としてのあり方を考えさせられた。
4. 質問が個人的になってしまって、全体的な話にならなかった。前に出ている人がしゃべりすぎ！ もっと参加者のニーズを汲みあげる努力をすべき。伝えたいことがあるのは分かるが、一方通行だった。そして会場が寒かった。



(3) 全体への評価

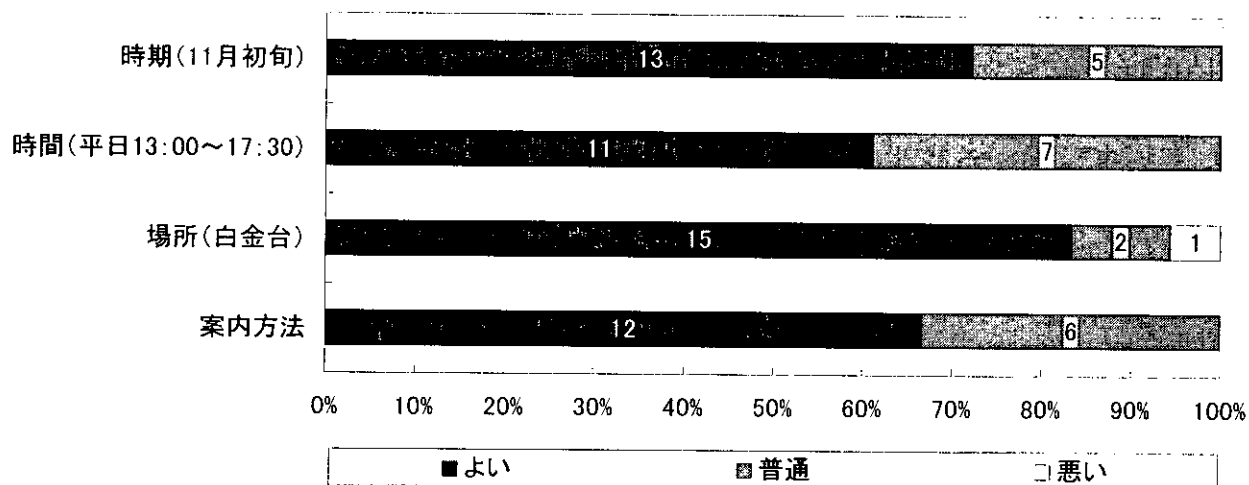


図1-10 ワークショップ開催形式の評価

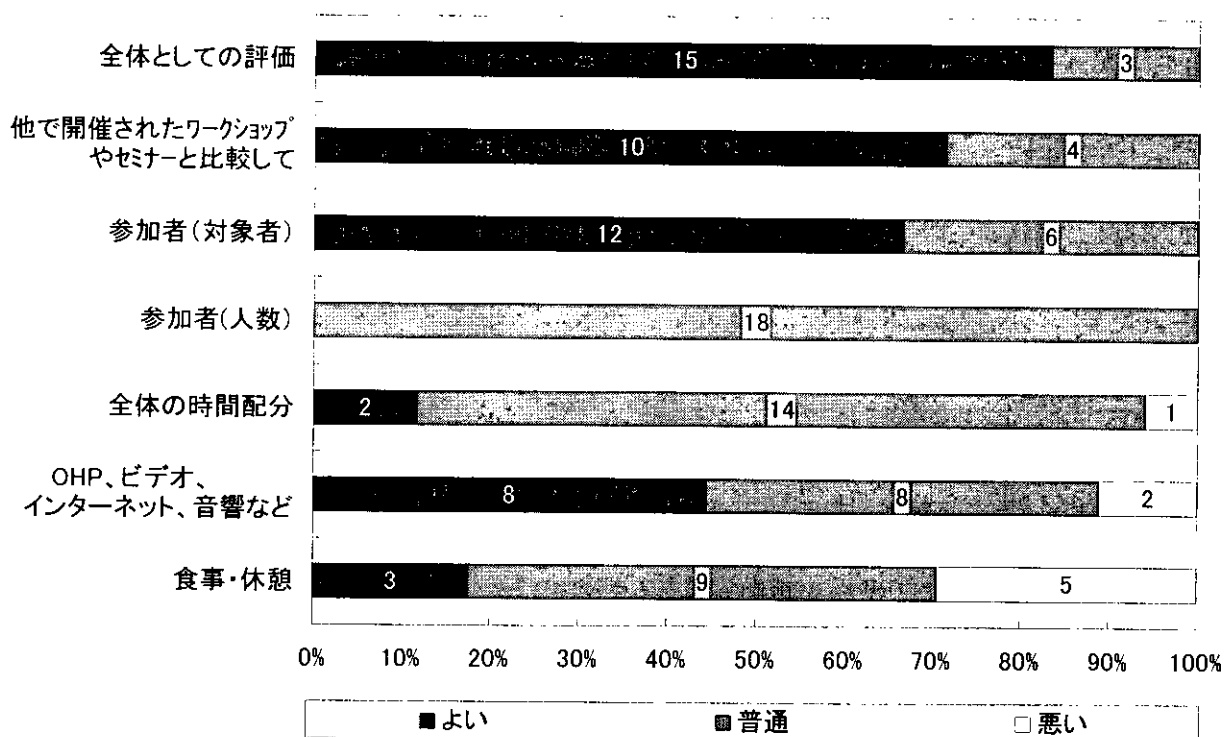


図1-11 プログラム全体の評価

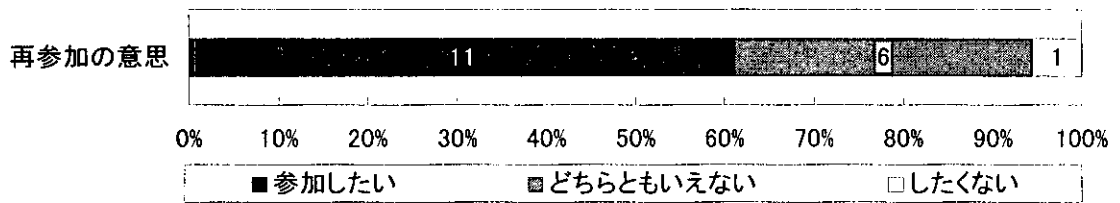


図1-12 自分自身の再参加の意思

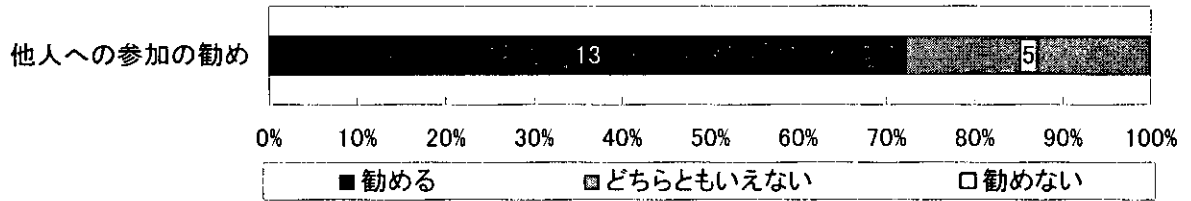


図1-13 他人への参加の勧め

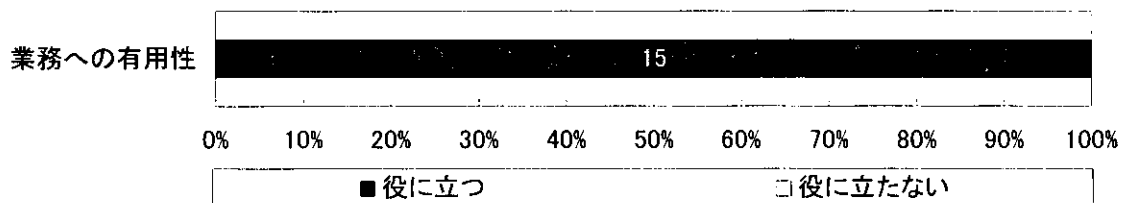


図1-14 業務への有用性

表1-9 ワークショップに関する希望

<p><b>時間</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. もう少し余裕があってもいいのでは、と思いました。終日は無理かもしれませんが。</li> <li>2. やや長い</li> </ol> <p><b>場所</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 東大本郷キャンパス</li> <li>2. すこし遠い</li> <li>3. 次回からは白金台ではなくなるのでしょうか</li> </ol> <p><b>案内の方法</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 案内をいただいた時に、どのような性質の雑誌(編集者)を対象とされているのかわかりにくくと思いました。</li> </ol>
--

表1-10 今後の業務に役立つと感じた点

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 編集者としてEBMに必要な観点を学びました。しかし、編集委員や特に特権的集団としての医師にはなかなか抗し難い事態は変わるには時間がかかりそうで。</li> <li>2. EBM、構造化抄録の必要性を再認識することができた。</li> <li>3. 研究を活用する上での編集者の役割を感じた。Medlineの使い方をキチンと勉強していたので、活用のヒントがえられた。</li> <li>4. 文献検索の効率化</li> <li>5. 一般的な理解として。</li> <li>6. 役だった点:日頃目にするDr.の論文に対しての選択眼を養えたように思う。pubmedの使い方が理解できた。役立たない点:日頃投稿論文を扱う機会が少ないので、討議の内容は良くわからなかった。</li> <li>7. 役に立つ:各種サイトのアドレスの提供。役に立たない:学術雑誌を編集する立場の意見。</li> <li>8. 情報検索の方法</li> <li>9. 福岡先生の研究デザインについての解説</li> <li>10. 記事執筆及び依頼原稿の整理</li> <li>11. 情報検索が今後より効率よくできるようになると思います。また、チェックすべき点等、再認識しました。</li> <li>12. 自身が担当する出版物が純粋に学術誌、論文発表の場とはいええない(商業出版)が、「出版倫理」の認識が改まった。</li> <li>13. すぐに役立てられるのは、書誌事項確認でデータベースを活用する点です。小誌は「解説」論文が主で、研究・投稿論文はありません。これまでEBMは「企画テーマとして扱うべきもの」としか考えていませんでしたが、「編集者としての関わり方」もあるのだとわかったことがとても有用でした。しかし、具体的に、どのようにすべきか、どこまで意識すべきかは、まだよくわかりません。</li> <li>14. 効率のよいPubMed検索の手順を教えていただいたこと、他社(誌)の編集者も自分同様の不安も抱えながら一定のノウハウの蓄積で業務を進めてきていることがわかったこと、自信になった。</li> <li>15. PubMedなどのデータベース実習は、トップページだけ使っていた現状を変えられるいろいろな方法がわかりました。現状、医学中央雑誌がわが社では使えないのが残念です。</li> <li>16. 検索のやり方やPubMedの機能について教わった点。文献の表記のしかたや構造化抄録の重要性が理解できた点。</li> <li>17. 実務的にはPubMedの活用は役立つ。考え方としては、「倫理的な個」に役立つ(特集をよく組むので)。</li> </ol>
--

表1-11 特に印象に残った点

- 
1. 今までの自分に欠けていたというのが、出せなかった観点であったこと、EBMはぜひ、広めるべきと思いました。
  2. 撤回情報が正しく伝えられているか？ という問題と、この問題に対するPubMedの対応の仕方など、これまで認識の薄かった問題なので考えさせられた。
  3. 研究者が英語で文献を書けるのが当たり前の時代になったら、日本の学術誌はすべて翻訳誌と解説書になるのではないかと感じた。また、そこまでいなくてもエビデンスを示す原著論文などには早期に英文抄録と構造化抄録が必要であると感じた。
  4. 栗原先生がおっしゃられた「患者の立場を代弁してガイドライン、クリティカルパス作成の参にも編集者が参加できるように」
  5. 福岡氏の話。EBMに対し、Dr.がどのように向きあっているのかが実感を持って理解できた。
  6. 自分の業務に直接役立つ部分が少なく、規定されている受講者像とのズレを感じた。
  7. 論文の不正投稿に関する話
  8. 1～3の前半の内容と、5～6の後半の内容にかなりのギャップを感じた。わたしは前半には関心があるが、後半の内容になると、残念ながらあまり関心がなくなってしまう。ワークショップも、区別して開催した方が良いかもしれない。
  9. 意見交換も活発にできてよかった。
  10. 質疑応答の時間帯で、講師陣の熱意を再確認できたこと。
  11. 「医学研究デザインと医学ジャーナルの関係」は、聞いたことはあれど、実際今一つわかりにくいEBMがどのようなものか、医学雑誌編集初心者である私も、多少なりとも理解できるようになったのでは、と思います。
  12. 二重投稿や投稿内容の問題点についての山崎先生のおはなし。
  13. 論文のデータベース化の細目が理解できた。5年前ぐらいの文献検索と格段の差があったことがびっくり。
-